

大阪商業大学学術情報リポジトリ

芭蕉の菊の句

ー「白菊」を詠んだ発句の解釈を中心にー

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2022-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 敏, ISHIGAMI, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1156

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



芭蕉の菊の句

―「白菊」を詠んだ発句の解釈を中心に―

石上 敏

- 一、はじめに
- 二、「白菊よく」―延宝期―
- 三、「恥長髪」とは―天和期―
- 四、芭蕉の菊の句―貞享・元禄期―
- 五、元禄七年の「白菊」
- 六、おわりに

一、はじめに

私は近時、「暗越奈良街道と芭蕉―東大阪市における文化の論として、松原宿を中心に―」、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考―「枯野」は河内野ではなかったか―、「清滝や波にちり込青松葉」考―支考と去來の証言を検証する―という三編の論稿を投じた¹⁾。いずれも最晩年の芭蕉について、すなわち元禄七年（一六九四）九月九日の朝に奈良を発ち、大和と河内の国境に当たる生駒山の暗峠^{くらがり}を越えて難波^{なにわ}（大坂）へと至り、一か月余り後に亡くなるまでの芭蕉の動向や発句について考察したものである。

九月九日の暗峠越えを「菊の香にくらがり登る節句かな」（『菊の香』）と詠んだ芭蕉は、翌十日付の杉風宛書簡に「いまだ句体定め難し」と述べつつも、「菊の香やならには古き仏達」「菊の香やならは幾代の男ぶり」「ひ（び）いと啼尻声悲し夜の鹿」と、奈良を詠んだ発句を並べている。ところが芭蕉は、十日の午後から周期的に「さむけ、熱、頭痛」（九月二十五日付松尾半左衛門宛書簡）に悩まされ、連日午後から夜分にかけてその状態を繰り返しつつ十日ほどを過ごす。その間、畦止亭の月見会が予定されていた十三日には、住吉大社の升市を見物中に体調をくずし、急遽句会を欠席して宿泊先（高津の門人酒堂の邸）へと引き返している（支考『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』）。翌十四日には小康を得て、大坂へやって来たそもその目的である酒堂と之道という二人の門人の仲違いを仲裁するための最初の句会に参加し、「升買て分別かはる月見かな」（『笈日記』難波部）と、前日の欠席を埋め合わせるかのような発句を詠んでいる。

仲裁を目的とした句会は十九日にも其柳亭で開かれ、『笈日記』によれば、「八吟歌仙を興行し、その発句に」として、芭蕉は「秋もはやは（ば）らつく雨に月の形」と雨の中で見えない月の姿を詠んでいる。『三冊子』によれば、その初案は「昨日からちよつくと秋も時雨かな」であり、秋雨が続いていたことがわかる。この頃、芭蕉の体調は比較的よかつたようで、当日の句会は四日置いて開かれたのに対して、次回は一日置いただけの二十一日に車要（車庸）亭で催され、芭蕉は「秋の夜を打崩したる咄かな」と発句を詠んでいる。とはいえ、二十六日の句会が十吟半歌仙で終了しているように（半歌仙は十八句）、芭蕉の体調に鑑みて他の句会も短時間で終了したものと考えられる。

それらの席で、両者（両派）融和のためにどのような話し合いが持たれたのかは、記録が残らないのでわからない。手打ちがなされなかつたのだとしても、有意な話し合いが持たれたのであれば、誰か、たとえば伊賀上野から芭蕉が亡くなるまでの一か月余り、師匠とともに行動し、その動向を書き留めていた支考が記していてもよかつたと思われる。二十五日の正秀宛書簡で芭蕉が匙を投げ、酒堂の姿が芭蕉臨終の枕頭にも追悼行事にも見えないことは、決裂という結果を想起させる。おそらくそこには建設的な話し合いは存在しなかつたのであろう。

この三回（十四日、十九日、二十一日）で酒堂と之道の仲裁を目的とした句会は終了し、芭蕉は二十五日の正秀宛書簡に「之道酒堂両門の連衆打込之会相勤候」と、もはや自らの役割は終わったと、ため息でもつくかのようにしたためている。実際、芭蕉の容態が悪化する最中に酒堂は大坂を離れてしまい、芭蕉の逝去に際しても帰坂することはなかつたという。角突き合わせる門人たちに、「升買て分別かはる月見かな」と「分別」（物事の善悪・道理）を改めるように諭し、「秋もはやばらつく雨に月の形」と悪天候の中でも月の姿は思い浮かべられるものだと言語かけた芭蕉は、「秋の夜を打崩したる咄かな」と一座の中から談笑が沸き起こるような融和を促したのを最後に、仲裁をあきらめたようである。

二十一日の両者融和のための最後の句会を終え、雨天を考慮したこともあったのだらう、その晩芭蕉は車庸の邸に泊まった。翌日、「あるじは夜あそぶことを好みて朝寝せらるゝ人なり。宵寝はいやしく、朝起きは忙し」と題詞を付して、「おもしろき秋の朝寝や亭主ぶり」(『まつのなみ』)と滑稽な発句を詠んでいることは、この晩、芭蕉の体調が比較的落ち着いていたことを想像させる。このあと芭蕉は酒堂の邸ではなく、葉種問屋街で知られる道修町の之道のところへと向かったものと思われる。九日の大坂到着から酒堂邸で過ごした芭蕉が、いつ之道のもとに移ったのかを記した史料は現存しないが、九日から二十日までが十二泊、そして車庸邸に一泊して、二十二日から花屋仁右衛門方へと移る十月五日までと同じく十二泊である。両者のところに応分に泊まったという芭蕉自身の言及とも、この日程は合致する。¹¹⁾

二十三日に故郷の兄・半左衛門に宛てて綴った書簡には、「私南都に一宿、九日に大坂へ参り着き」と記したあと、「十日の晩よりふる(震)ひ付き申し、毎晩七つ時(午後四時頃)より夜五つ(午後八時頃)まで、さむけ、熱、頭痛参り候ひて、もしは、おこり(周期的に悪寒や発熱、身体の震えなどを惹き起こす病気の総称)に成り申すべきかと薬給候へば」と記して兄を驚かせ、そのあとで、一転「二十日頃よりすきと(すっきりと)やみ申し候」と書いて安心させている。兄に甘える弟の姿を垣間見せる書状であるが、同日の意専(猿雖)・土芳宛書簡には「いまだ気分も不勝(すぐれず)」と吐露しており、依然として体調不良に悩んでいたことがわかる。ただ、二十日頃には病状がいったん治まったために、十九日に其柳亭、二十一日に車庸亭の句会に参加することもできたのであろう。

九月九日の重陽のことは、半左衛門のいる故郷を出立して以降の消息としてのみ記したわけではなかった。二十三日の意専・土芳宛書簡にも、「九日南都をたちける心を」として「菊に出て奈良と難波は宵月夜」、「秋夜」として「秋の夜を打崩したる咄かな」、「秋暮」として「この道を行(ゆ)くなしに秋の暮」という三句が記されている。「秋の夜を」が二十一日の車庸亭で詠んだ発句の再掲である以外は初見であり、いずれも「秋の夜を」の前後に詠まれたものと推定できる。そして、九月下旬のこの時期に至っても芭蕉は「九日南都をたちける心」のままに、この短い旅を反芻し、九月九日の重陽の句境のなかにいたことがわかる。とりわけ「菊に出て奈良と難波は宵月夜」の句は、「九日南都をたちける心を」という題詞にも示しているように、九月九日の重陽の「心」、すなわち長寿を祈りつつ標高四五メートルの暗峠を越えてきた奈良から難波(大坂)への短い「旅」の心を、九月末に至ってもなお芭蕉が持ち続けていたことを示す句といえる。¹²⁾ ちなみに九月九日の重陽は、杜甫の漢詩をもとに「登高」とも呼ばれ、この日に高いところに登ると長生きができると信じられていた。¹³⁾

二日後の二十五日にも、芭蕉は正秀に宛てた書簡に、先ず「重陽之朝、奈良を出て大坂に至り候故」と記して、「菊に出て奈良と難波は宵月夜」の句を掲げている。大坂到着から半月ほどを経て詠まれたこの句からは、「之道酒堂両門の連衆」を仲裁するために、それまでにない

苦しい旅を経て伊賀上野から大坂へとやつてきた芭蕉が、翌日から連夜の「さむけ、熱、頭痛」に苦しめられながらも、重陽の節句の象徴であり、長寿を祈るための「菊」にこだわり続けていたことを看取することができる（前稿Ⅰ・Ⅱ）。

このように、芭蕉が菊を意識し続けていた頃に詠まれたのが、園女亭での発句「白菊の目にたて、見る塵もなし」であった。すなわちこれは園女亭の句会で当意即妙に詠まれた菊の句なのではなく、少なくとも九月九日以降ずっと継続していた芭蕉の菊へのこだわりがおのずから詠ませた発句であったといえる（前稿Ⅱ・Ⅲ）。以下、芭蕉の菊の句を解釈するために、芭蕉にとって菊とは、とりわけ白菊のイメージとは、どのようなものであったのかを考察したい。「白菊の目にたて、見る塵もなし」という発句をさらに深く理解するために、年次を追って芭蕉が詠んだ菊の句を考察しながら、芭蕉にとって「白菊」がどのようなものであったのかを考えてみたい。

二、「白菊よ〜」——延宝期——

芭蕉が直接「白菊」を詠んだ発句は、二例のみが知られている。ひとつは右に述べた「白菊の」の句であり、もうひとつは、延宝年間（一六七三〜八〇年）あるいは天和年間（一六八一〜八四年）と推定される真蹟短冊に「白菊よ〜、恥長髪よ〜」というものがある。

あまりの破調に芭蕉句としては否定的な評価も多かったが、『莊子』天地篇の「命長ければ恥多し」を踏まえた、「天和期の破調句の典型」という捉え方で、現在は落ち着いている。真蹟短冊が残るのみで、どの句集にも収録されなかったことも、この破調句の否定的な評価に結びついたものと思われる。この句が、延宝期から天和期にかけて、芭蕉の作句期間の中でも早い時期の発句であったことは、おそらく間違いない。そして、ここからは芭蕉の白菊に対するひとつのイメージを知ることができる。それは端的に言って「白髪の老人」である。

諸注の中でも、「白菊の美と花期の長さを驚嘆する心を大げさに逆説的に表現」という今栄蔵氏の指摘は貴重である。白菊の美的な価値を芭蕉が愛でたという点と、この句の生命である長さへの驚嘆という指摘において、「白菊よ〜、恥長髪よ〜」は、十（五・五）・七・五（または七）という句形から成る破調句である。そこにあるのは、もはや俳諧の発句というより、あたかも芝居の台詞である。韻文として考えるならば、その音律は七・七・七・五の都々逸とどいっに近く、端唄や小唄の一節と言っても通用するのではないだろうか。¹⁸⁾

ただ、これが延宝期や天和期の句であるならば、芭蕉の破調句としては同時期に以下のような例がある。江戸出府後の芭蕉の発句は延宝三

年(一六七五)から確認できるのだが、同年や翌四年には「武蔵野や一寸ほな鹿の声」(『俳諧当世男』)、「命なりわづかの笠の下涼み」(『俳諧江戸広小路』)など、五・七・五の定型に従ったものがほとんどである。字余りがあったとしても「富士の風や扇にのせて江戸土産」(『芭蕉翁全伝』)、「百里来たりほどは雲井の下涼」(同前)と、せいぜい一字(二音)で、破調句は見当たらない。ただ、延宝四年の暮れに宗因の「年たけてなりけりなりけり春に又」を踏まえて詠んだ「成にけりなりにけり迄年の暮」(『俳諧江戸広小路』)は、謡曲の詞章を踏まえつつ大胆な反復を採用した発句という意味で注目される。⁽¹⁹⁾

延宝五年(一六七七)は、芭蕉が俳諧宗匠の立机をしたとされる年であるが、この年に『伊勢物語』第五段の「むかし男ありけり。ひむがしの五条わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、わらわべのふみあけたる築泥のくづれより通ひけり」を典拠として詠んだ「猫の妻へついの崩れより通ひけり」(『俳諧江戸広小路』)は、中七に「竈(へつい・へつつい)の崩れより」と詠んだことで五・九(または十)・五という相当な字余りとなっている。とはいえ、この年の発句もほとんどが定型であり、極端な破調句は見られない。ただ、この年の冬に詠んだ「あら何共なやきのふは過て河豚汁」(『桃青三百韻』)は、初句が「あら何ともなや」という能・狂言に由来する感嘆の言葉であり、芭蕉句の特徴のひとつとなる「裁ち入れ」は、このように初期の発句にもしばしば見受けられる。⁽²⁰⁾

翌六年になると、年頭に「庭訓の往来誰が文庫より今朝の春」(『俳諧江戸広小路』)という歳旦句が詠まれている。音律や句形のみならず、用字や句想にしても、「かびたん(甲比丹)もつくばはせけり君が春」(『江戸通町』)、「あやめ生り軒の鯛のされかうべ」(『俳諧江戸広小路』)、「実や月間口千金の通り町」(『江戸通町』)など、この年の芭蕉句は、いわばかなり自由度を増している。まさに談林調と呼ぶべきであるが、それだけではなく、芭蕉ならではの特徴も加わりつつある。この頃、従来から取り上げられることの多い「阿蘭陀も花に来にけり馬に鞍」(『江戸蛇之魚鮓』)が詠まれているが、この期の芭蕉句の中では極端な談林調とはいえず、むしろ「甲比丹」と好一對の定型句といえる。

延宝七年には、「見渡せば詠れば見れば須磨の秋」(『芝肴』)という、あたかも実朝の「われてくだけて裂けて散るかも」のごとく、字句を改めつつ反復を趣向する発句がある。また、重陽の菊の句ということで「盃や山路の菊と是を干す」(『俳諧坂東太郎』)にも注意を払ってきたい。これは、延宝三年秋の句と推定されている「盃の下ゆく菊や朽木盆」(『俳諧当世男』)と同じく重陽に飲む菊酒を詠んだものであり、「盃の」は延宝五年成「六百番誹諧発句合」に載り、後述の通り、現在知られる限り最初の菊の句である。「盃や」とともに、この頃の芭蕉の関心が、実際の菊より典籍中の菊にあることをうかがわせている。

そして、延宝も最後の年となる八年(翌九年は九月二十九日に天和に改元)の芭蕉句は、「於春々大哉春と云々」(『俳諧向之岡』)という

六・七・七の歳旦を皮切りに始まる。踊り字（反復記号）を「く」に改めて「於春く大ナル哉春と云く」と表記してみれば明らかのように、この句の表記が「白菊よく恥長髪よく」に最も近いものといえる。さらに、「悲しまむや墨子芹焼を見て猶」（同前、六・八・五）、「花にやどり瓢箪斎と自いへり」（同前、六・七・七。真蹟写しの別案には「瓢單堂」）、「五月の雨岩ひばの緑いつ迄ぞ」（同前、六・八・五）と、この年に至って破調句の快進撃が始まる。延宝八年に詠まれたと考えられる十七句の発句の内、五・七・五の定型は、わずかに五句を数えるにすぎない。その一方で、この年の破調句には「夜竊虫は月下の栗を穿ッ」（『東日記』六・七・六）、「體の声波うつて腸氷夜やなみだ」（『武蔵曲』、十・七・五。真蹟懷紙には、「體声波をうつて腸氷る夜は涙」九・七・五）などと、ことさらに漢文調を押し出そうとしたものが目立ち、これも談林ならではの特徵といえよう。このような漢文調の句は、往々にして音律も破調にならざるを得ない。

「夜竊虫は月下の栗を穿ッ」は趣向に凝りすぎた句であると評され、中には問男を諷した句と穿ッ解釈もあるようだが、私はこの頃から芭蕉が生物・無生物を問わず「小さきもの」を凝視して、その気持ちを斟酌するかのようにならざるを得ない。その一環であると理解している。それは、「悲しまむや墨子芹焼を見て猶」（『俳諧向之圃』六・八・五）、「蜘蛛と音をなにと鳴秋の風」（同前、五・七・五）など、『墨子』や『枕草子』といった典拠のある句として始まった。一見、奇をてらった発想にも思えるのだが、芭蕉は焼かれる芹や、寒さの募る中で鳴く蜘蛛などといった「小さきもの」に、そっと心を寄せている。

このような傾向は、この年の後半に至って特に顕著に見られるようになる。木の葉と一緒に水に落ちて流れる虫に対して「よるべをいっひと葉に虫の旅ねして」（『東日記』）、枯れ枝にとまる鴉を見て「枯朶に烏のとまりけり秋の暮」（『あら野』）などと生物に心を寄せる一方で、『芭蕉翁真蹟拾遺』の「冬月江上に居をうつして、寒を侘る茅舎の三句」という題詞に従うのであれば、「けし炭に薪わる音かをの（小野）、おく」（『続深川集』）は消し炭をじつと見つめ、かつて生物（樹木）であった頃の消し炭の故郷に思いを馳せる発句である。そして、このことはやはり延宝八年の冬に深川の芭蕉庵に入った、またはそれ以前から入る準備を進めていたことによる心境の変化であり、句境の深化と呼ぶべきであろう。それは、客観的には乏しい生活であったかもしれないが、たとえば「雪の朝独り干鮭を噛み得」（『東日記』）に付した題詞「富家ハ喰ヒ肌肉ヲ丈夫ハ喫ヌ菜根ヲ予ハ乏シ」からも窺えるように、主観的には他に代えるもののない究極的に豊かな暮らしであった。

小さきものを温かく凝視する視線は、年次不明とされる「餅花やかさしにさせる嫁が君」（『堺絹』）や「はりぬきの猫も知るべし今朝の秋」（『芭蕉句撰拾遺』）などとも共通している。前者は「餅花を簪に差すのか」と鼠に問いかける句であり、後者は今朝秋風が吹いたことを（風に吹かれて首を振る）張り子の猫に語りかける句である。生物・無生物の違いはあるが、いずれも「小さきもの」への共感を込めた呼びかけである。

私は、このような視点を、「ほろく」と山吹ちるか滝の音(『笈の小文』貞享五年)の「か」は、世間一般に言われている詠嘆の助詞ではなく、山吹への問いかけを込めた呼びかけなのだ(赤羽学先生に教えていただいた)。そして、現在これらは芭蕉の自画像とも呼ぶべき自照句でもあると考えるに至っている。

もう一句、年次不明ながら延宝年間の吟と推定される句に、「松なれや霧えいさらえいと引ほどに」(『俳諧翁艸』)がある。謡曲『百万』の「えいさらえいさ、挽けやくく」、同じく『千鳥』の「えいさらえいさらと仰られひ(い)、心得た、えひさらえひさら」などのほか、謡曲では『岩船』、また説経節『小栗判官照手姫』などにも頻出する、物を引く際の掛け声を用いた句である。それらの中でも、蘇生した小栗を藤沢の上人が土車に乗せて引いてゆく道行き場面の「えいさらえい」という掛け声は、多くの人々の耳に残ったことであろう。この句の解釈には諸説あり、たとえば誰かが霧を「えいさらえい」と引いて(次第に晴れて)松が現われたと説く『芭蕉句集』、霧が「えいさらえい」と松を引いているものの松は動かないと説く加藤楸邨の『芭蕉全句』などが代表的なものである。確かに、この言葉を用いた前例に照らせば、ある程度の重量のあるものを引く時に出すのが「えいさらえい」だと考えられるので(それゆえの掛け声であろう)、前者の「霧を引く」という解釈は腑に落ちない。後者は、『新芭蕉俳句大成』が言うように、巨勢金村の「筆捨ての松」に因むことは間違いないので、「これがあの巨勢の金村が筆を捨てた松なのか」と「松」が主体(主語)になると解釈すべきである。その松が、「霧をえいさらえいと引く」というのがこの句の主意であろう。霧という、無重量に近いものをあたかも重い荷物のように引き、霧の質感を描き出すところにおもしろみ、すなわちこの句の生命があり、芭蕉の手柄がある。このように、該句が松を擬人化した、いわば狂言仕立ての発句であることは間違いない。

三、「恥長髪」とは——天和期——

天和元年(延宝九年)以降、天和年間に入ると上述のような芭蕉句の特色は、さらに強調される。年次を追って見て行きたい。

天和元年

A、「盛ちや花に坐浮法師ぬめり妻」(七・八・五または四・六・十)『東日記』 破調・掛け声・繰り返し

- B、「山吹の露菜の花のかこち顔なるや」（五・七・八または七・五・八）『東日記』 破調・呼びかけ・植物の擬人化
 C、「夕顔の白^ル夜の^ル後架に紙燭とりて」（五・十・六または八・七・六）『武蔵曲』 破調・漢文調・植物の擬人化
 D、「五月雨に鶴の足みじかくなれり」（五・五・七）『東日記』 破調・漢籍を踏まえる
 同二年

- E、「艶^{エンナルヤツコ}奴今やう花にらうさいス」（七・七・五）木因宛書簡 破調・漢文調
 (別案) 艶なるやつこ花見るやたが歌のさま（七・七・五）真蹟短冊 破調・漢文調
 F、「梅柳さぞ若衆哉女かな」（五・七・五）『武蔵曲』 呼びかけ・繰り返し・植物の擬人化
 G、「雪の鮎^{ウツ}左勝水・無月の鯉」（五・五・七）『虚栗』 破調・繰り返し
 H、「月十四日今宵三十九の童部」（七・九・三）真蹟懷紙（藥耨亭句会） 破調・繰り返し
 I、「髭風吹て暮^{スル}秋嘆^ハ誰^ガ子」（五・十一・四または八・八・四）『虚栗』 破調・漢文調

これらの内、A～Dは延宝年間以前の可能性も考えられる。それでも、各句の下に破調・漢文調などと記したように、この期の特徴がそれぞれに表われている。Aは、「盛りぢや」という芝居掛かった掛け声や、「花に坐浮法師ぬめり妻」という破調をいとわぬ不思議な並列が、気分として「白菊よく、恥長髪よく」を思わせる。C・E・Iは明らかかな漢文調であり、Fの「若衆かな女かな」は「浮法師ぬめり妻」と比べるならば健康的で爽やかだが、これも「梅柳」に対する問いかけを含んだ呼びかけを重ねた句である。そして、Iは題詞に「老杜を憶ふ」とあり、その点で「白菊よく」と作句の気分が重なる。G・Hは、さらに大胆に句題を従来の俳諧の発想の外に求めている。ただし、特に句会の詠には、その場の空気や他の句との関わりを考慮に入れる必要があることは言うまでもない。

これらの他にも、天和年間（同四年二月二十一日に貞享に改元）の作とされる発句に「起^{おき}よく我が友にせんぬる胡蝶」（『あつめ句』）があり、「起きよく」と繰り返す呼びかけが、「白菊よく」を思わせる。これを真蹟短冊の別案では「酔胡蝶」としており、この形では夢中の胡蝶（『莊子』）の気配が、より強まる。また、同じ句境を詠んだ発句としては、『莊子』のいわゆる「胡蝶の夢」を踏まえて「蝶よく、唐土^{ちゆうど}のはいかい（俳諧）問む」（六・五・七または六・九・三）という『俳仙遺墨』の胡蝶への問いかけを趣向した句があり、これは『蕉翁句集』では「唐土の俳諧とはんとぶ小蝶」と五・七・五の定型で詠まれている。この頃『莊子』の夢中の蝶は、とりわけ談林でよく用いられた素材ではあった

が、「蝶よ〜」という呼びかけは、「起きよ〜」とともに「白菊よ〜」という呼びかけに通ずるものがある。蝶への呼びかけに思うような応えが得られない折には、「榎や花なき蝶の世すて酒」(『虚栗』)と、蝶の姿を借りて芭蕉は世捨て人の顔をしてみせる。その無常観・孤独感の行きつく先に「ほと、ぎす今は俳諧師なき世哉」(『鹿島紀行』)という述懐があつたのだと言える。このように振幅の激しい年月が三代の終わりから不惑を迎えようとする芭蕉の天和期であつた。

芭蕉にとつての白菊が、芝居掛かつた呼びかけにふさわしい花であつたことは、「白菊の目にたて、見る塵もなし」という発句の解釈にも有効であろう。ただし、「白菊よ〜」が、おそらく延宝末年から天和初年、芭蕉が未だ談林の強い影響下にあつた頃の発句であつたのに対して、「白菊の」はその最晩年、何度かの俳風の変遷を経て専ら「軽み」へと至ろうとしていた頃の作句であることは十分に意識しておく必要がある。いわば両者の間には、何度も変身を繰り返した芭蕉がいるのであり、それらを一般的な意味で同一人の発句と考えることはできない。

前稿Ⅱでは、九月九日の重陽以降の芭蕉の「心」を知るために、特に菊の句を考察したのであるが、芭蕉の門人たちの菊の句とのかかわりということ、たとえば『あら野』(元禄三年刊か)には野水が「詩題十六句」として『白氏文集』に題材を求めて詠んだ発句の中に、巻十五「歳晚旅望」に想を得た「白菊や素顔で見むを秋の霜」がある。これは藤原公任撰『和漢朗詠集』に「万物秋霜能懷色。四時冬日最凋年。／歳晚旅望 白居易」と載り、広く知られた詩句であつた。白菊を女性の素顔に喩え、秋の霜を化粧に見立てた詩であつて、園女を白菊に見立てる芭蕉の「白菊の目にたて、見る塵もなし」という発句に影響を与えた可能性がある。

ところで、「恥長髪よ」と呼ばれた真蹟短冊の「白菊」の正体は、以下に見るように、実は菊ではなかつた。『続猿蓑』秋之部は、晩秋の景物として「菊」の項を立てており、そこには先ず「翁草二百十日恙なし」という薦筆の句を載せる。「翁草」に翁(芭蕉)を掛けて、芭蕉が恙ない(健康で過ごす)ことを言祝いだ発句と理解できる。翁草は、その根を乾燥させて「白頭翁」と呼ばれる薬種(漢方)の原料とする植物であり、キンポウゲ科の多年草である。しかし、当時はその形状から菊の一種と考えられていた。すなわち「白頭翁」という名称は、乾かした根の形もさることながら、花が終わつたあとに羽毛のように長く垂れ下がった白い花柱の形による比喩的な命名であつた。菊は、その薬効や除虫などの消毒機能で知られ、それらは菊が長寿・延命の象徴とされる根拠にもなつた。「白菊よ〜恥長髪よ〜」に記された「白菊」は、この翁草のことであつたと考えられる。先に、この句の「白菊」のイメージを、一言でいえば「白髪の老人」であると記した所以である。そして、このイメージは、いわゆる天和調(虚栗調)の主潮である漢詩文調と密接に結びついている。『続猿蓑』の「菊」の項に収められた二句目は、濁子の「ゑぼし子やなど白菊の玉牡丹」で、これもまた見立ての句である。『小倉百人一首』にも採られて人口に膾炙する凡河内

躬恒の「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」（『古今集』）以来、白菊は他の何かにまぎれてしまいまぎらわしいものとして詩歌に詠まれ続けた。芭蕉は、そのような白菊の来歴を、むしろ避けるように上記の二度しか白菊を詠んでいない。菊そのものは、発句だけで大略三十三句（現存句の三%以上）にも及んでいるのにもかかわらず。

「ゑほし子やなど白菊の玉牡丹」とは、元服の際の仮親である「烏帽子親」の子供は、どうして白菊なのに「玉牡丹」（菊の種名）などという名がついているのかという、いささか複雑な構造を持つ発句である。烏帽子親というのは、男子の元服の際に烏帽子をかぶせ、幼名から大人の名をつける役を果たす者をいう。「名をつける」という大事な役目と「菊なのに牡丹の名のついた玉牡丹」という矛盾を諷して詠んだものであり、烏帽子の黒と白菊の白という対比的な色彩を意識しているだろう。そこに点描として牡丹の緋色が加わり、中国風山水画のような独特の色彩が感じられる一句となっている。その意味で、先の漢詩文調とも通底する。

四、芭蕉の菊の句 — 貞享・元禄期 —

以上の諸点を踏まえたうえで、芭蕉の菊の発句について概観して行きたい。すでに触れたものを含めて年次別に一覧すれば、以下のようになる。①～③③の数字は、推定される作句の順である。

- ① 盃の下ゆく菊や朽木盆
（延宝三年秋か『俳諧当世男』）
- ② 盃や山路の菊と是を干す
（延宝七年以前『坂東太郎』）
- ③ 白菊よ〜恥長髪よ〜
（延宝八〜天和元年頃 真蹟短冊）
- ④ 秋をへて蝶もなめるや菊の露
（貞享二〜五年頃か『笈日記』）
- ⑤ 瘦ながらわりなき菊のつぼみ哉
（貞享四年以前『続虚栗』）
- ⑥ 起あがる菊ほのか也水のあと
（貞享四年秋『続虚栗』）
- ⑦ いざよひのいづれか今朝に残る菊
（貞享五年九月十日『笈日記』）

- ⑧ 菊鶏頭きり尽しけり御命講
 (元禄元年十月『忘梅』)
- ⑨ 山中や菊は手をらぬ湯の匂ひ
 (元禄二年七月八月『韻塞』)
- ⑩ はやくさけ九日もちかしきくのはな
 (元禄二年秋『蕉翁句集』)
- ⑪ かくれ家や月と菊とに田三反
 (元禄二年秋『笈日記』)
- ⑫ さくの露落て拾へばぬかごかな
 (元禄二年か『芭蕉庵小文庫』)
- ⑬ 折ふしは酢になるさくのさかなかな
 (元禄三年頃『泊船集』)
- ⑭ 蝶も来て酢を吸ふ菊のすあへ哉
 (元禄三年頃『篇突』⑬の別案とも)
- ⑮ 稲こきの姥もめでたし菊の花
 (元禄四年秋『笈日記』)
- ⑯ 草の戸や日暮てくれし菊の酒
 (元禄四年九月九日『笈日記』)
- ⑰ 朝茶のむ僧静也菊の花
 (元禄四年か『ばせをだらひ』)
- ⑱ 菊の後大根の外更になし
 (元禄四年頃か『陸奥衛』)
- ⑲ 初霜や菊冷初る腰の綿
 (元禄四年冬『荒小田』)
- ⑳ なでしこの暑さ忘るゝ野菊かな
 (元禄五年秋『旅館日記』)
- ㉑ 影待や菊の香のする豆腐串
 (元禄六年秋『杉丸太』)
- ㉒ 菊の花咲や石屋の石の間
 (元禄六年秋か『藤の実』)
- ㉓ 見どころのあれや野分の後の菊
 (元禄六年か『藤の実』)
- ㉔ 琴箱や古物店の背戸の菊
 (元禄六年秋か『住吉物語』)
- ㉕ 一露もこぼさぬ菊の水哉
 (元禄六年秋〜冬『陸奥衛』)
- ㉖ 菊の香や庭に切たる履の底
 (元禄六年十月九日『続猿蓑』)
- ㉗ 寒菊や醴造る窓の前
 (元禄六年十一月八日付荊口宛書簡)
- ㉘ 寒菊や粉糠のかゝる臼の端
 (元禄六年『すみだはら』⑲の別案の可能性も)
- ㉙ 菊の香やならには古き仏達
 (元禄七年九月十日付杉風宛書簡)

- ③〇 菊の香やならは幾代の男ぶり
（同前杉風宛書簡、②9の別案の可能性も）
- ③1 菊の香にくらがり登る節句かな
（元禄七年九月『菊の香』）
- ③2 菊に出て奈良と難波は宵月夜
（元禄七年九月二十三日付意専・土芳宛書簡）
- ③3 白菊の目にたて、見る塵もなし
（元禄七年九月二十七日『菊の塵』）

以上三十三句である。⑬⑭、⑲⑳、㉑㉒が、それぞれ同句の別案であったとしても、計三十句と非常に高率を占めている。芭蕉が菊を詠んだ約三十句の中で、菊を含む漢字熟語は③③の「白菊」の他に、⑲⑳の「寒菊」、㉑の「野菊」という三種類を数えるのみである。他は、成語としては「菊の花」が⑩⑮⑰⑳の四句、「菊の露」が④⑫の二句、中でも、のちに見るように「菊の香」が五句で際立っている。しかし、他の多くは「菊」のまま詠まれている。

先に、芭蕉が③「白菊の」を元禄七年九月二十七日の句会で詠んだのは、決して唐突なことではなかったと述べたが、こと「白菊」としては、久方振りであり、それまでの菊の句からは独立した印象がある。明らかに別の句形である⑭を含めて、同句の別案であるとも考えられる三例も、それぞれ一句と数えれば、これまでに知られている「菊」を詠んだ全三十三句のうち、貞享以前に詠まれた発句が①⑦の七句であるのに対して、元禄以後の句が⑧③の二十六句あり、芭蕉の菊の句の大半を占める。七対二十六（約一対四）ということになるが、芭蕉の全発句約一千の内訳は貞享以前と元禄以後ではほぼ二対三であるから、いかに元禄以降に菊の句が多いかがわかる。中でも元禄六年と七年という晩年の二年間で十三句と四割近くを占め、晩年に至るにつれて芭蕉の菊への関心が高まっていたことを知るのである。

以上のように、元禄五年以前には菊は実にさまざまな形で詠まれていた。たとえば用字にしても、重なるのは「菊の露」や「菊の花」など先に挙げた通りであるが、それに対して元禄六、七年には「菊の香」が五例もあって、この間、芭蕉がいかに「菊の香」に拘泥していたかを知るのである（前稿Ⅱ・Ⅲ）。また、このように芭蕉の菊の句を通覧して気づくことのひとつに、芭蕉には「後（のち）の菊」「残る菊」を詠んだ句の少なくないことがある。たとえば④「秋をへて蝶もなめるや菊の露」の季語は「菊の露」で秋句ではあるが、「秋をへて」（秋を過して）とあるので晩秋とも秋の後（冬）とも取ることができる。すなわち秋の終わりまで生き残った蝶が、さらに冬に入ってもなお生き残っているとも受け取ることができる。それを蝶が菊の露を舐めたので長寿を保っているのだと見立てたのである。同じく『笈日記』が記す⑦「いざよひのいづれか今朝に残る菊」は、十六夜の月と十日の菊のどちらがよいか（あるいは、まさか）と問うた句で、おそらく芭蕉は「花は盛

りに、月は隈なきのみを見るものかは」(『徒然草』百三十七段)と喝破した兼好法師と同じように、いずれにも甲乙付けがたい価値を認めている。これらを貞享期の特徴とするには句数が足りないが、開花前の菊を詠んだ⑤「瘦ながらわりなき菊のつぼみ哉」を併せて、これらに一定の傾向を読み取ることは可能だろう。

元禄期に至っても、⑭「蝶も来て酔を吸ふ菊の酔和へかな」は、儒教の蘇東坡・仏教の仏印・道教の黄魯直という儒・仏・道の三教を代表する三名が一堂に会した折に桃花酸を嘗め、同じように眉を寄せたという故事「三聖吸酔」を踏まえている。儒仏道の三教は表面的には異なっているが、求めるところは同じである(やっつけていることは変わり映えしない)という諷諭である。聖なるイメージの強い菊だけに、「酔和へ(あえ)」との落差が効果を生む。この趣向は儒・仏・神の三教、その代表格である孔子・釈迦・天神などの戯画化によって、近世中期以降に盛行する戯作の中でしばしば取り上げられることになった。また、それは浮世絵などの画題ともなっており、繰り返し描かれてゆく。芭蕉の「蝶も来て」の句は、近世期における聖人諷諭の早い頃の一例と呼べるだろう。⁽⁴⁰⁾

⑬「折ふしは酔になるさくのかなかな」も菊の高雅さゆえに効果をもつ発句であり、⑮「稲こきの姥もめでたし菊の花」や⑯「菊の後大根の外更になし」などの句も、菊が長寿の象徴であるということ以上に、菊に対する神聖視・特別視があつてこそ興が湧く発句である。そのような菊の聖性は⑰「朝茶のむ僧静也菊の花」という寺院の静謐な時間と結びついて、なお一層この特別な花の価値を高めている。そのような菊の花ゆえに、芭蕉は時に子どものように率直に⑩「はやくさけ九日もちかしきくのはな」と菊の節句を待ったのである。

もうひとつ、①「盃の下ゆく菊や朽木盆」や②「盃や山路の菊と是を干す」のように、これは芭蕉に限らぬことだが、菊には何かを見立てる句が多い。いずれも菊慈童の故事を踏まえて、前者は菊水の長寿伝説、後者は甘谷の山路の菊に見立てたものだが、『校本芭蕉全集』が指摘する素性法師の「ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我は経にけむ」(『古今集』)や、『芭蕉発句全講』⁽⁴¹⁾が指摘する、それを踏まえた謡曲『俊寛』の「濡れて干す山路の菊の露の間に、我も千年を経る心地」などが意識されたものであろう。同様に、⑨「山中や菊は手をらぬ湯の匂ひ」にも菊慈童の故事が踏まえられている。湯の香を菊の香と結び、菊のように湯気を手折ることはできないと湯気を菊に見立てた句だが、先に見た⑭「蝶も来て酔を吸ふ菊の酔和へかな」も同様に見立ての句ととることができる。菊が何かに見立てられる句は、⑫「菊の露落ちて拾へばぬかご(零余子)かな」に明らかのように、菊を何かと(何かに)見間違えるという発想と強く結びついている。その背景には、すでに見たように『小倉百人一首』に採られた凡河内躬恒の「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」(『古今集』)があり、それ以来の長い伝統にもとづく「白菊は視覚をまどわせるもの」という合意が存在したものと考えられる。

そして、ここではもうひとつ、白菊とは折れるものなら折り取って持ち帰りたいと願われる花であったことに注意する必要がある。それは言い換えれば、折りたいたけれどもなかなか折れないというジレンマを抱える、いわば切ない願望の象徴であった。つまり、菊は「高嶺の花」の代表格でもあったのである。園女を白菊に見立てた³³「白菊の目にたて、見る塵もなし」は、当然この要素を踏まえたものである。園女がこの時代の女性としては特別な資質を有し、それを隠そうとしなかったことは別に述べた（前稿Ⅲ）。資質の発露は主に後年のことになるが、大坂時代にも因襲に捉われない彼女の主体性は「目に立った」のであろう³⁴。

このように、貞享から元禄にかけての芭蕉の菊の句は、次第に談林臭を脱しながらも、ひとつの傾向を明瞭に示している。すなわち、正面から素直に菊を詠むのではなく、あえて残りの菊を詠んだり、菊を何かに（あるいは何かを菊に）見立てたりと菊のイメージをひねって用いる句が多い。それは、むしろ詩歌の伝統に沿った扱いともいえるわけだが。先に³「白菊よく／＼恥長髪よく／＼」について見た通り、この難解な句は、後年の芭蕉の菊の句から抽出される、以上のような傾向をも含めて考えられてよい。しかし、晩年の元禄六年頃になると、²³「見どころのあれや野分の後の菊」は確かに「残りの菊」ではあるが、野分（台風）のあとであるから菊の花は乱れ、おそろくすでに大半は散っている。そして「見どころのあれや」と呼びかけつつ、そのような乱れた菊の姿に、あえて見どころを求めたのが、この期の芭蕉であった。

²⁴「影待や菊の香のする豆腐串」は元禄六年の秋の句とされる菊の句であるが、いかにも年中行事（ハレ）の影待（日待）と結びついた菊の香という景物を持ち出しながら、豆腐串という日常（ケ）につなげる手際が際立つ。「豆腐串」とは聞き慣れぬ言葉であるが、「豆腐に串を刺した田楽と見て相違あるまい。正月・五月・九月の「影待」の中でも、この年最後となる九月の行事に芭蕉が実際に参加して徹夜をしたかどうかはわからないが、豆腐田楽の焼き味噌の匂いと菊の香とが混然一体となったさまは、物質文明の発達した江戸の市中でも未だ郊外とすら呼べない深川（川向う）の野趣に溢れた素朴な風景を連想させる。また、²²「菊の花咲くや石屋の石の間」も、元禄六年の秋に詠まれたと推定される発句であり、同じ年の作と考えられる²³「見どころの」とともに『藤の実』（元禄七年跋）に収められる。石屋に積まれた石と石の間という不安定で過酷な場所に咲きながら、その姿は見るからに高貴だったのであろう。「掃き溜めに鶴」という諺があるが、この句からは、そのような趣が読み取れる。ただ、芭蕉は積まれた石にも興趣を感じていたのであろう。「咲くや石屋の石の間」という軽やかな反復は、あたかも積まれた石とともに積まれた言葉の反復のおもしろさを示すようでもある。

¹⁶「草の戸や日暮てくれし菊の酒」と詠んだ元禄四年九月九日の重陽の節句には、芭蕉はまだ菊酒を嗜むほどには健康だったのであろう。菊酒は重陽に欠かせないものだが、芭蕉が詠んだ菊酒の句は、初期の¹²以来のものである。「日暮てくれし」という反復は、「咲くや石屋

の」と同様に軽々とした表現である。そして、この句には、晩年(元禄七年)の秋に芭蕉が繰り返し詠んだ「日暮れ」が、すでに詠み込まれている。つるべ落としに沈んだ夕べの物寂しい時間に、乙州が草庵に持参してくれた酒で菊酒を酌み交わそうというのであるが、酒飲みであれば、届け物などは待たずに先に一人で飲み始めていただろう。芭蕉の「草の戸」は、「草の戸も住替る代ぞひな(雛)の家」(「おくのほそ道」)が広く知られるが、芭蕉にはこれらの他にも「草の戸をしれや穂蓼に唐がらし」(「笈日記」)と「草の戸」を詠んだ句があり、それぞれに寂寥感を湛えている。そして、②⑥「菊の香や庭に切たる履の底」は元禄六年十月九日の詠句である。この年の秋、芭蕉は「おくのほそ道」の完成に向けて相当の時間と労力を傾けていた。『おくのほそ道』では初秋から仲秋への菊を詠んだ⑨を除いて菊が詠まれない。そこに描かれた秋に登場するのは、菊ではなく萩の花であった。もっともそれは元禄二年九月六日、重陽の三日前に終わる旅であったから菊の季節にはやや早い。萩の花の盛りということもあったのだろうが、逆に芭蕉は、なぜ重陽までを旅の日程に含めなかったかと思われる。『おくのほそ道』の完成したのが元禄七年四月、すなわちその彫琢に芭蕉が最も傾注したのは同六年の秋から七年の春にかけてであったと想像される。

その元禄六年の秋から冬に至るまで、芭蕉はそれまでになく多くの菊の句を詠んでいる。推定も含めて八句。それは、『おくのほそ道』に菊を詠めなかったことから、いわば反作用的に詠まれた句であったということだろうか。中でも、十月に素堂亭では一か月遅れの重陽の宴すら開かれている。そこで詠まれたのが②⑦「菊の香や庭に切たる履の底」であった。何か典故がありそうだが、これまでに指摘されたことはない。切れた「履の底」が菊の咲き盛る庭に落ちているというのである。早々に家業の酒造業から身を引き、仕官も長からず致仕して勉学に打ち込み、隠居状態にあった素堂の邸が、それほど贅沢なつくりであったとは思えないが、それでも菊の盛りを見られるほどに手入れの行き届いた庭であったのだろう。ひと月遅れの十月九日の菊がどのような様子であったかはわからないが、発句に従う限り菊の香はまだ残っていたようである。それが虚構であったにせよ、菊の咲く庭でなかったならば立脚点を失う。しかし、そのように手入れされた庭に履の底は落ちているものなのだろうか。むしろ、隠逸な暮らしを選んだ仙人のような素堂ゆえに、「履」には中国風の趣が付与されており、何らかの意図があつて切った履の底が置かれていた(と詠んだ)と見たほうがよいのではないかと思われる。また、素堂といえは、芭蕉とともに天和調(漢詩文調)を推し進めた中心人物であった。いずれにせよ、「唐」(中国)の趣が強い菊花であり、その雰囲気を押保するために「履」が詠まれたものと考えておきたい。

なお、②⑤「一露もこぼさぬ菊の水哉」は、これも見立ての句である。そして、氷の季節(冬)であるから、長く花時を保ったあとの菊(後の菊)である。ただし主眼は「続猿蓑」の前書に「范蠡が趙南のこゝろをいへる山家集の題に習ふ」と記すように、西行に追随した句である。

具体的には司馬遷の『史記』に見えるエピソードを踏まえて、西行が「すてやらで命をおふる人はみな千々の黄金ちがねをもちてかへるなり」と詠んだ短歌にもとづいている。菊の隠逸また高雅なイメージを逆手にとり、凍った菊の花が大金を握った守銭奴の手のようだと卑俗に落としてみせたのである。この「一露もこぼさぬ菊の水哉」が秋から冬にかけての微妙な季節を取り込んだ発句であったのと同様、⁽⁴⁸⁾⑱「初霜や菊冷初る腰の綿」も冬を目前にした秋の終わりの句である。「初霜」とあるから本来は冬の句であつてよいのだが、この句を記した羽江うづこう（凡兆の妻）への書簡によれば、「ふゆのうちは山ふかき方かたへかくれまいらせ候」（冬の間は山深いところに隠れ住んでいます）と記されており、その直前のものであつたと推定できる。

五、元禄七年の「白菊」

以上、延宝・天和期と推定される①～③から、貞享期の④～⑦、そして元禄に入つて六年までの芭蕉句⑧～⑳を粗々と見てきた。詠まれた時期に関しては、もとより推定とは異なる可能性もあるが、元禄期に関しては、それ以前よりも作句の時期は明確である。

端的に言つてひねった句の多かつたこれらに対して、元禄七年の菊の句（⁽²⁹⁾⑳～㉓）は、どれほど素直なものばかりであらうか。それらは㉓「白菊の」を除いて典拠も認められず、奈良・難波と地名は出て来るが、⁽³¹⁾㉑「くらがり登る」に暗峠を詠み込んだ以外に、いずれも土地への追蹤の句というわけでもない。ましてや込み入った見立てが仕掛けられているわけでもない。それまでになく悪い体調を押して、九月八日から九日までの一泊二日で約七十四キロの距離を、特にその後半は徒歩で移動してきた芭蕉は（前稿Ⅰ・Ⅱ）、翌日午後から病臥してしまふのであり、そのような病苦の中で詠まれた句であつたということもあるのだろう。とりわけ九月十日付杉風宛の書簡に記された⁽²⁹⁾㉑「菊の香やならには古き仏達」と⁽³⁰⁾㉒「菊の香やならは幾代の男ぶり」には、「いまだ句体定め難く。他見なさるまじく候」と付記されており、続けて記された「ひ（び）いと啼尻なぐ声悲し夜の鹿」とともに、未完成ゆえ人前には出せない芭蕉が考えていた発句であつた。そのうえ、「菊の香やならには古き仏達」と「菊の香やならは幾代の男ぶり」は、先述の通り同一句の別案であつた可能性がある。これらの完成度が低かつたとしても、それは無理からぬことであつただろう。

一方、元禄七年九月二十三日付意専・土芳宛書簡に見える⁽³²⁾㉔「菊に出て奈良と難波は宵月夜」は、九月九日の大坂到着から十四日後に詠ま

れた(最初に記された)句であり、九月十日から二十日頃まで「さむけ、熱、頭痛」に悩まされていた間にも、芭蕉が九月九日の重陽に高い場所に登れば長寿を保つことができるという「登高」を実践して、標高四五メートルの暗峠を越えた直近の旅を反芻しながら、その短い旅をめぐる句を詠もうとしていた姿を浮き彫りにする。そして、そのように芭蕉が菊にこだわり続けていた中で詠まれたのが、九月も末近くの二十七日に園女亭の句会で詠まれた³³⁾「白菊の目にて、見る塵もなし」であった。もちろんこれは、かねて言われているように、「園女を「白菊」に見立てて詠んだ挨拶の発句である。しかし、園女亭での句会に至って唐突に菊が取り上げられたわけではなく、芭蕉の「心」は九月という晩秋(菊月)の間ずっと菊とともにあり、いわば必然的に詠んだ発句が「白菊」の句であった³⁴⁾。この句の西行歌との関係は早くから指摘されてきたことであるが、芭蕉最晩年の西行への思いについては先日改めて考察する機会を得た³⁵⁾。

ここで注意しておきたいのは、逝去前年に当たる元禄六年十月九日、すなわち九月九日の重陽の節句から一か月後に詠んだ³⁶⁾「菊の香や庭に切たる履の底」(『続猿蓑』)である。この句には、「元禄辛酉之初冬九日、素堂菊園之遊、重陽の宴を神無月の今日に設け侍る事は、その頃は花いまだ芽ぐみもやらず、「菊花ひらく時即ち重陽」といへる心により、かつは展重陽のためしなきにしもあらねば、なほ秋菊を詠じて人々を勧められける事になりぬ。」という長い題詞が付されている。芭蕉とその折の連衆が一年前の重陽に「菊花ひらく時即ち重陽」という気分で「素堂菊園之遊」、すなわち月遅れの「重陽の宴」を催していたのである。このことが重要なのは、翌元禄七年という最晩年にも、前年に引き続き九月(晩秋)が終わり十月(初冬)に入ってなお芭蕉が菊に拘泥しているからである。

九月晦日(二十九日)に向けて詠んだ「秋深き隣は何をする人ぞ」(『笈日記』)以降、十月に入ってから八日の「旅に病て」まで、芭蕉は発句を詠んでいない。その主な要因は、二十九日の激しい下痢以来、病状が急速に進んだからであるが、それでも作句が不可能であったかどうかは微妙である³⁷⁾。しかし、病状は十月以降に一段と悪化する。五日には畿内周辺の主立った門人に向けて芭蕉の容態を知らせる使者(飛脚だろう)が出発した。彼らは翌六日、遅くとも七日までに京都・大津・彦根・膳所・伊勢・尾張などの門人たちに芭蕉重篤の報をもたらし、門人たちは七日から続々と芭蕉の病臥する花屋仁右衛門の貸座敷へと駆けつけるのである(前稿Ⅲ)。

この忠臣蔵的な芭蕉最期の場面に心動かされた芥川龍之介が、『花屋日記』を座右に書き上げたのが「枯野抄」(大正七(一九一八)年『新小説』十月号初出)であった。芥川自身の述べ(「一つの作が出来上るまで」)によれば、以下の通り³⁸⁾。

その「枯野抄」といふ小説は、芭蕉翁の臨終に会った弟子達、其角、去来、丈艸などの心持を描いたものである。それを書く時は「花

屋日記」といふ芭蕉の臨終を書いた本や、支考だとか其角だとかいふ連中の書いた臨終記のやうなものを参考とし材料として、芭蕉が死ぬ半月ほど前から死ぬところまでを書いてみる考であつた。勿論、それを書くについては、先生の死に会ふ弟子の心持といつたやうなものも私自身もその当時痛切に感じてゐた。その心持を私は芭蕉の弟子に借りて書かうとした。

その後、二転三転した構想は、偶然知人が入手した、蕪村描くところの「芭蕉涅槃図」を見て「それを見ると、私の計画が又変つた。で、今度はその「芭蕉涅槃図」からヒントを得て、芭蕉の病床を弟子達が取り囲んでゐるところを書いて漸く初めの目的を達した。」（同前）と、私たちが知る「枯野抄」の形へと落ち着いたのである。

六、おわりに

以上通覧したように、前期から中期にかけて、いわば曲芸的な詠まれ方をされてきた芭蕉の菊であつたが、後期（元禄期）に至り俳風が次第に落ち着きを見せると軌を一にして、談林風のケレン味を脱却し、平易さを加えてゆく。そのような推移は菊の句に限ったことではないが、なかでも菊は、この期の芭蕉句に取り上げられる代表的な景物として芭蕉俳諧の推移を象徴的に担っているもののひとつであり、注目し値する。芭蕉の発句で、その数において菊に匹敵する花は梅と桜くらいであろう。梅は三十九句が知られており、桜は十六句。ただし、「花」という表現で桜を詠んだ句を含めるならば、その数は四十余句に膨れ上がる。

芭蕉もまた日本の歌人・俳諧師の御多分に漏れず秋の句を最も多く詠んでいるので、菊の句が多いとしても当然であつただろう。本来であれば、菊以外の花々との比較を通じて、芭蕉にとつての菊が何であつたかを論ずるべきであろうが、すでに紙幅の余裕がない。

それにしても、菊ほど象徴性に富んだ花はない。そのことは、芭蕉の菊の句にも意識的に取り入れられている。本稿にもとづいて、今後、すべからく続稿を期したい。

【謝辞】

松尾芭蕉のことは、恩師・赤羽学先生のお教えを措いては考えることができない。この四月に先生の訃報に接し、改めて、いただいた御恩の大きさ深さに思いを致している。また、芭蕉について考えるに当たり、前任の中川光利先生が大阪商業大学に残してくださった芭蕉関係の研究書や事典などによって、どれほど助けられたか計り知れない。いずれもここに銘記して、心よりの御礼を申し上げます。

注

(1) 暗峠及び、この峠を越えて芭蕉が大坂へとやってきた奈良(春日大社)と大坂(玉造)を結ぶ街道(脇往還)の暗越奈良街道に関しては、拙稿「暗越奈良街道と芭蕉―東大阪市における文化の論として、松原宿を中心に―」(『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第二二号、二〇二〇年七月、以下、「前稿Ⅰ」、芭蕉が亡くなるまで最後の旅にこだわり続けていたことは拙稿「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考―「枯野」は河内野ではなかったか―」(『日本文学』第七〇巻第四号、二〇二一年四月、以下、「前稿Ⅱ」、むしろ辞世句と呼ぶべきは「旅に病て」の翌日に改訂された「清滝や」の句であると考えられることは拙稿「令和三年度解釈学会全国大会(第五十三回)研究発表報告「清滝や波にちり込青松葉」考―支考と去来の証言を検証する―」(『解釈』第六十七巻第九・十号(通巻七二二集)二〇二一年十月、以下、「前稿Ⅲ」)に論じた。

(2) 田中善信『全釈芭蕉書簡集』(新典社、二〇〇五年)参照。以下、芭蕉書簡は同書に拠る。

(3) 芭蕉の発句は、主に堀切実・田中善信・佐藤勝明編『諸注評釈新芭蕉俳句大成』(明治書院、二〇一四年)を参照。以下、同様。また、発句における補記や注記、収録された代表的な句集などの出典は、適宜(一)に入れて示すこととする。

(4) 各務支考『芭蕉翁追善之日記』は赤羽学校注『芭蕉翁追善之日記』(岡山大学国文学資料叢書八)(福武書店、一九七四年)による。『笈日記』は元禄八年(一六九五)刊。引用は、早稲田大学図書館蔵初版本(雲英末雄氏旧蔵本、請求記号…文庫E121011)に従う。

(5) 書簡等によれば当初芭蕉は、自分が仲裁すれば両者の仲違いもすぐに解消するだろうと甘く考えていた節がある。しかし、そうはいかなかった。この後も同様の句会は再三開催されるが、結局両者の融和は実現しなかった。次第に病勢が募って行く時期、芭蕉の心労・心痛は察して余りある。

(6) 服部土芳『三冊子』は、元禄十五年(一七〇二)成、安永五年(一七七六)刊。引用は、中村俊定・山下登喜子校註『三冊子』(笠間書院、一九六九年)に従う。

(7) ただし、支考はすべてを書き留めているわけではなく、記録する内容を選別する場合も少なくなかった。注(4)の『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』

の他、去来の『旅寝論』『去来抄』などを参照。

(8) 「之道酒堂両門の連衆打込之会相勤候」のあとは、「是より外に拙者働とても御座無く候」（このこと以外に、私の（大坂での）はたらきは何もないので）と続く。同日の曲翠宛書簡にも、芭蕉は「酒堂一家衆、其元御衆、達て御す、め候に付、わりなく杖を曳候」（酒堂一派の連中や、そちら（近江）の門人衆が、ぜひともと勧められたため、仕方なく杖をつけてやって来ました）と記している。さらに「おもしろからぬ旅寝の体、無益の歩行、悔やみ申すばかりに御座候」と記すなどのことより、芭蕉につらい思いをさせた大坂連衆の評判は悪く、とりわけ酒堂の評判は散々である。

酒堂は元禄二年に入門して以来、芭蕉との間に頻繁な書簡の往復もあり（元禄三年六月二十六日、同四年二月二十二日、同五年二月十八日、同六年六月二十日と、四通の書簡が知られている）、同五年九月から翌年一月まで深川の芭蕉庵に住み着くなど濃密な付き合いがあったが、芭蕉逝去の際には全くその姿を見せない。最晩年の芭蕉を悩ませた之道との角逐は、元禄六年に酒堂が大坂へと移住して独立した（と言えば聞こえはよいが、すでに確立していた大坂の蕉門をかき回した）ことに始まるのであり、病が進行する中で芭蕉の骨折りにもかかわらず両派の再三にわたる会合が物別れに終わったことも、酒堂の人格が大きく関与したと思われる。とはいえ、入門が二十三歳、芭蕉逝去の際に二十七歳の若者が、どれほど世間体を理解できたであろうか。酒堂は芭蕉の葬儀に参列せず、追悼句も詠まなかったとあしざまに記されるのが常であるが、芭蕉逝去のおそらく数日ほど前に大坂を発って旅に出たために芭蕉の逝去を知らなかった可能性もあり、追悼句を詠んだとしてもどこにも載せてもらえなかったかもしれない。もちろん、芭蕉の病状を知りつつ旅に出してしまった軽率さや、事後の埋め合わせもしなかった無責任さは責められても仕方がない。一方の之道が芭蕉の末期まで親身に介護を続け、没後にも追悼句を詠むなど哀悼の意を示したことで酒堂の不在がよけいに際立ってしまったが、酒堂の言いつ分を欠いたままの品評は、私には一方的すぎるようにも思える。なお、同書簡にも「当着マツの明る日よりさむき熱あつ（さむさ熱）晚おそくにおそひ」と記されている。また、芭蕉は二十三日付の兄・半左衛門宛書簡にも「長逗留は無益」と記し、二、三日中に大坂を離れる意向を伝えている。

(9) 野田別天楼開題・安井小酒校訂『市の庵（蕉門珍書百種 第四編）』（蕉門珍書百種刊行会、一九二四年。思文閣出版、一九七一年の復刻版）に拠る。ただし、その典拠・根拠は明確ではなく、支考や去来は芭蕉の臨終に駆け付けたすべての門人・知己を記録しているわけではない。また、仲裁の句会がこの三回であったことは未だ確定していないが、この頃の芭蕉の動向に照らして（前稿Ⅱ）、おそらくそうだろうと考えられる。

(10) 上記三句の解釈は専ら仲裁に寄せて芭蕉の胸中を推し測ったものである。現存の書簡中に両者の関係の不調を芭蕉が記し始めるのは元禄七年六月頃からであるが、前年夏に酒堂が大坂に進出して以後、その兆候はあったのであろう。なお、泥足編でいそ『其便そのたより』（元禄七年刊）、園女編『菊の塵』（宝永三年成）などに見える九月二十六、二十七、二十八日の句会に酒堂と之道が同席している形跡があるが、前日（二十五日）の曲翠（曲水）宛書簡や

支考の記録(『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』)などに照らして、それらは仲裁を目的とした句会ではなかったと判断できる。

(11) 元禄七年九月二十五日付正秀宛芭蕉書簡。ただし、問題はこれが来坂後十七日目の書簡であることであり、この時点で泊数が同じならば、芭蕉は九月十七日には酒堂宅から之道宅へと移っていたことになる。ちなみに同書簡には、「酒堂が、予が枕元にていびき軒をかき候を」として芭蕉が詠んだ「床に来て軒に入るやきりぐす」の句が記される。のちに「猪の床にも入るやきりぐす」(『三冊子』)とされるが、大坂到着後の芭蕉に甘えていた酒堂の姿が余すところなく示されている。それだけに、甘えたまま譲歩を受け入れなかったたのであろう。医師の酒堂が病床の芭蕉のもとを去るといふのは皮肉なめぐりあわせであった。一方の之道も薬種商であり、芭蕉が逝去の七日前に病床を道修町から南御堂へ移した理由は、之道の職業を考慮し、憚ったものと考えられる(前稿Ⅱ)。

(12) 注(1)の拙稿(前稿Ⅱ)に論じた。結局芭蕉は、酒堂邸に到着してから花屋で亡くなるまで三十二泊(九月に二十一泊、十月に十一泊)を大坂で過ごすことになる。このわずかな期間に「菊の香やならには古き仏達」から「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」まで十六首(改案や別案を含めれば約二十首)を詠んでいる。その中には「この道を行人なしに秋の暮」や「秋深き隣は何をする人ぞ」など後世名吟とされる発句が少なくない。

(13) 芭蕉は九月八日に伊賀上野を発ち、「十七、八里」(七十km前後。実際には二日間約七十四キロメートル)を移動した。支考は『笈日記』で「難波津の旅」と記し、『芭蕉翁追善之日記』によれば芭蕉自身も「旅」と語っている。そして、それは高低差四五〇メートル以上を行く道程の大半を徒歩で移動する(特に二日目は全距離を徒歩で移動する。前稿Ⅰ・Ⅱ参照)「旅」であった。

(14) 九月九日に高いところに登れば長寿を保つことができるという当時の俗信にもとづいて、この日に奈良を發ち、暗峠を登ることを選んだゆえの旅程であったと考えられる(前稿Ⅱ)。

(15) 近時、深沢眞二氏によつて芭蕉の菊の句への考察がなされている(「菊を詠む―芭蕉発句叢考」『連歌俳諧研究』一二七号、二〇一四年)。「旅する俳諧師―芭蕉叢考二」清文堂出版、二〇一五年所収)、本拙稿は、特に年次や作品を定めず網羅的に芭蕉の菊の句を考察するものである。また、園女亭での白菊の句は当初「しら菊」(『芭蕉翁追善之日記』)と表記されるが、園女編『菊の塵』の「白菊」を採る。

(16) 注(3)『新芭蕉俳句大成』「白菊よく恥長髪よく」の項(堀切実氏執筆)参照。

(17) 『芭蕉句集(新潮日本古典集成51)』(新潮社、一九八二年)。

(18) 「白菊よく」は、「しらぎくよ、しらぎくよ」と読む以外は考えにくいだが、「恥長髪よく」は、「はじながかみよ、ながかみよ」であったか、それとも「はじながかみよ、はじながかみよ」と読んだのか。前者であれば、「七・五」、後者は「七・七」で、全体では「五・五・七・五(または十・七・五)」

- か「五・五・七七（または十・七・七）」かということになる。初句（または初句と二句）とのバランスを考えれば、同じように「七・七」がよいだろうが、韻律的には「七・五」のほうがすっきりと落ち着く。もうひとつ、「しらぎくよ、きくよ、はじめながかみよ、ながかみよ」とすれば、「八・七・五」となり、「五・七・五」に最も近づく。なお、芭蕉の「貝おほひ」に見える「小六ついたる竹の杖。ふし／＼多き小唄にすがり」の後代への影響の一端について、かつて論じる機会があった（拙著『万象亭森島中良の文事』所収「戯号」竹杖たけづえのすゐ為軽かろの背景―松尾芭蕉への親炙―」、翰林書房、一九九五年）。
- (19) 芭蕉の表現に関しては、堀切実『表現としての俳諧』（ペリかん社、一九八八年）を参照。
- (20) 謡曲『雲林院』に「枝を手（た）折り給へば、おことは花のためは風よりも辛き人や、あらなにともなの人や」とあるなど、「あらなにともなや」は、先の「なりにけり、なりにけり」と同様に謡曲由来の掛け声である。
- (21) 芭蕉の馬の句を、かつてまとめて考察する機会があった。拙稿「競馬文学論序説」（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所』第14号、二〇一二年）。
- (22) 注（3）『新芭蕉俳句大成』による（「盃の」は田中亜美氏、「盃や」は塚越義幸氏執筆）。
- (23) 「花にやどり」は、大江匡房「百年の花に宿りてすぐしてきこの世は蝶の夢にぞありける」（『詞歌集』『堀川百首』）を踏まえる。『莊子』齊物論篇第二莊周夢為胡蝶、いわゆる「胡蝶の夢」は実に多くの和歌に採られたが、談林はまさにその流れを汲んでいる。
- (24) 『おくのほそ道』黒羽の条に「ちいさき者」、「我が宿は蚊の小ささを馳走かな」（『泊船集』）など元禄に入って用いられる詞だが、この頃から芭蕉は「小さきもの」を一貫して凝視し続けている。
- (25) 無差別の博愛精神をとなえる墨子は、焼石の上で蒸し焼きにされる芹を見てどう思うかと戯れたのである。
- (26) 赤羽学『芭蕉俳諧の精神拾遺』（清水弘文堂、一九九一年）、なお、第二章第一節「芭蕉の発句観賞」を参照。
- (27) 注（3）『新芭蕉俳句大成』参照（服部温子氏執筆）。
- (28) 小学館国語辞典編集部『精選版 日本国語大辞典』（小学館、二〇〇六年）参照。
- (29) 大谷篤藏・中村俊定『芭蕉句集（日本古典文学大系45）』（岩波書店、一九六二年）参照。
- (30) 加藤楸邨『芭蕉全句』下（筑摩書房、一九七五年）。
- (31) 注（3）『新芭蕉俳句大成』（服部温子氏執筆）参照。なお、「田一枚植えて立ち去る柳かな」も同様の構造であろう。芭蕉の俳諧世界では、松をはじめとする樹木が擬人化されることは珍しいことではなかった。

- (32) 発句・句形・出典・特色の順に掲げた。特色には、破調・漢文調、繰り返し・呼びかけなど、この期の芭蕉句の特徴といえるものを記した。なお、「白菊よ」の句が、これらの要素をすべて含んでいることを確認しておきたい。
- (33) 川口久雄校注『和漢朗詠集・梁塵秘抄（日本古典文学大系73）』（岩波書店、一九六五年）参照。
- (34) 別名「白頭公」。薬効は主に下痢止めであり、芭蕉は実際に服用していたかもしれない。早く八世紀の『出雲風土記』に「白頭公（おきなくさ）」の記載がある（注（28）『精選版 日本国語大辞典』）。
- (35) ただし、単に「菊」と見える句の中にも、白菊を念頭に置いた句はあっただろう。後掲の⑬は大根との対比、⑳は粉糠にまぎれるなど、㉑⑲⑱⑳⑳などの可能性がある。
- (36) 時代・地域によって差異はあるが、近世期には縁者が選ばれることが多かったという。烏帽子親については、今野慶信「鎌倉武家社会における元服儀礼の確立と変質」（『駒沢女子大学研究紀要』第二四号、二〇一七年）など参照。
- (37) 掲出句の年次・年代は、主に注（3）『新芭蕉俳句大成』を参照し、適宜（2）『全釈芭蕉書簡集』などで補った。③「白菊よ」以外は、㉑「菊に出て」を唯一の例外として、いずれも五・七・五の定型であることを付言しておく。ちなみに阿部正美『芭蕉発句全講』は、㉑を「きくにでて」と五音に読んでいる。
- (38) ⑬の「折ふしは酔になるきくのさかなかな」と⑭の「蝶も来て酔を吸ふ菊の酔和へかな」は同一句の別案であるという説もあるが、あまりに句形が異なるので、ここでは二句にかぞえた。なお、⑬には他に「折くは酔になるきくのさかなかな」（真蹟自画賛）という別案があり、これは一覧からは省いた。また、貞享元年「はつ雪の」歌仙の第三に芭蕉の「野菊までたづぬる蝶の羽おれて」（『冬の日』）がある。
- (39) ただし、㉑と㉒は同句の別案である可能性があり（前稿Ⅱ）、そうであれば「菊の香」の句は四例ということになる。
- (40) 三聖人を儒（孔子）・仏（釈迦または達磨）・道（老子）から儒・仏・神などへと変換しつつ、特に会話体戯作の洒落本が聖人の遊郭通いという形ではしばしば取り上げた。『洒落本大成』（中央公論社）を参照。三聖吸酸（三聖図）は、つとに雪舟の画で知られるが、日光東照宮の陽明門に彫刻として掲げられたことにより、特にこの時代には寒山拾得図などと並んで人口に膾炙した。しばしば狩野派によって描かれ、北斎の肉筆画や鳥文斎榮之の見立て美人画などが知られている。
- (41) 阿部喜三男『校本芭蕉全集（発句編（上））』（角川書店、一九六九年。復刻版、富士見書房、一九八八年）。
- (42) 阿部正美『芭蕉発句全講（1）』（明治書院、一九九四年）。

- (43) 芭蕉は貞享五年に初めて園女と会った際、彼女を梅に見立てている。その伏線を回収したという意味も考慮する必要がある。
- (44) この頃の人は庚申待ちなどの行事でよく徹夜をしている。さらに芭蕉は句会などで興に乗って夜を明かすこともしばしばであった（その代わり昼寝をしている）。元禄七年九月二十一日から二十二日にかけての車庸亭での夜更かしが、芭蕉最後の夜更かしと朝寝であったか。
- (45) 曾良の『随行日記』によれば、芭蕉は元禄二年七月二十七日から八月五日まで加賀の山中温泉に逗留している。
- (46) 『おくのほそ道』の成立時期については諸説あるが、草稿本の成立は元禄五年（一六九二）六月から翌年四月末までと考えられている。さらに推敲を加えた決定稿は素龍の清書を経て元禄七年四月に完成している。ただし、芭蕉自筆完本は伝存しておらず、その正確な成立時期は未詳である。
- (47) 素堂は芭蕉二十九歳の江戸出府直後からかわりの深かった旧知の人である。出府後の芭蕉最初の俳業と呼べる延宝四年（一六七六）の『江戸両吟集』は素堂との共作であった。天和調以来、共に蕉風を推進させた二歳年長の素堂とは、元禄期まで変わらぬ交流を続けたようであり、それだけに両者にしか通じぬ逸話があったことも十分に考えられる。元禄元年に素堂亭で催された「残菊の宴」が、知られる限り芭蕉の加わった最初の菊の宴であった。
- (48) 『芭蕉全句』（注（30）参照）に加藤楸邨が記すように、元禄六年の作とされる「しら露もこぼさぬ萩のうねり哉」とのかかわりが注意される。今後、菊との縁語である「露」などに考察の範囲を広げてゆく必要性があるだろう。
- (49) 第53回解釈学会全国大会研究発表「「清滝や波にちり込青松葉」考——支考と去来の証言を検証する——」（二〇二一年八月二二日、オンライン開催）『解釈』第六十七巻第九・十号（七三二集）に「令和三年度解釈学会全国大会（第五十三回）研究発表報告」として同題で掲載（前稿Ⅲ）。
- (50) 拙稿「芭蕉最晩年の難波の句」（『岡大國文論稿』第五十号、二〇二二年三月掲載予定）に今後の課題を述べた。
- (51) 支考の『芭蕉翁追善之日記』などに拠れば、芭蕉は九月二十九日以降、十月七日までの八日間、一切の句を詠んでいない。確かにこれは病勢の進行によるものであったが、今後この期間を含めて芭蕉の句境の推移を考察する必要がある。
- (52) 芥川龍之介「一つの作が出来上るまで」（大正九年三月稿）は、『芥川龍之介全集 第六巻 南京の基督・杜子春』（岩波書店、一九九六年）による。小宮豊隆『花屋日記（岩波文庫）』（岩波書店、一九二六年）参照。